



悦
目
抄

下

4
4499
2



身及細尺記
下

いせの峯を越出りてこゝと云ふ疾風を今もく
みらるる花よりなつてふりこのこゝろ
ふれくけりまあひうらたふれ
是よりこゝろ年と痛くはし草の院の音合
もさあられぬ
みゆりあつたつら
西本のうらたつたつた
毛又こゝろ山たあ
はらこゝろ人のこゝろ
押こゝろもつら
毛延喜十三の序子院の音合
流人字二あり

病よこゝろ
ちつこゝろ
あつこゝろ
はつこゝろ
これ三代集に入毛いたる人のこゝろ
中よこゝろ
あつこゝろ
病よこゝろ
わつこゝろ
あつこゝろ
いら

とらうてあつたやうに——
あつたやうにのびたやうに——
はつたやうにのびたやうに——
とらうてあつたやうに

まひくろくろくをいじひめて
まひくろくろくをいじひめて
まひくろくろくをいじひめて
まひくろくろくをいじひめて
まひくろくろくをいじひめて

うのまに母あつくうのひまはれくれ
まの終りせりしうのまに母あつくうのひまはれくれ
まの終りせりしうのまに母あつくうのひまはれくれ
まの終りせりしうのまに母あつくうのひまはれくれ
まの終りせりしうのまに母あつくうのひまはれくれ

一 童句とらふとあま

うらうらとくまふとくまふとくまふ

うらうらとくまふとくまふとくまふ

一 くらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

一 贈言これあまのこころ

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ



てあひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

のこころ

一 小町

のこころ

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

一 小町

くらひくらひくらひくらひくらひ

くらひくらひくらひくらひくらひ

一 あり

はましののちのめはまらるめかす所
神のふねもてあやうしとま

とらうたれいふ下 業平女よりつて

あきしを神いづしめたもてし行

めえあうりしとまうとくあまん

一 右三位とてしつてゆるりすとまのつたまひて

後冷泉院御一新

まふ人のふゆいふしつとりの

ふとあやふと行ふいふくせん

とあやふたれいふ武清

ふとあやふと行ふいふくせん

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

あうらうらうのうもそあ

松のまろついとあ〜〜

うらまらわくは〜と上よ〜やわ〜
の〜くみよ〜して先と〜うら〜とせん
〜とわ〜と初となれをひ〜もけ道乃魔也
む外乃是式秘抄云 現大身満虚空現小身入
芥子と〜り 雑音の云

我中ののののありお〜〜とれ

ちろとれえ〜とめさるま〜れ
東三条友大のあり〜とんむ〜とら
みろの老をからわぬこの春〜とす〜り
〜世れ〜とや〜とあ〜と

とさか〜とさ〜とさ〜とさ〜とさ〜と
あ〜のあねんよか〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
なる人の本も也のの事あわ〜とわわ〜と
く〜とた〜とん〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
あ〜の情初と〜とけ〜とさ〜とあ〜とさ〜と
〜とさ〜とさ〜とさ〜とさ〜とさ〜とさ〜とさ〜と
あ〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
上〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
右〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と
二句を〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜とら〜と

ちのひのほひふれをわくひのこいあやふまふりいひの
 人い甲あつりもいらとくわい二人をそとふりこ
 ちいもんそとふきん一はつらそと人いこいもらうわ
 ぬくねしと終いひひいこつみらひ人
 あまの難いあつらもあこらひいこいあひいあ
 うまふこくしとく人あふいひいこいこい也
 一
 ちのめらふこらぬに再いこい

山蔵
 只根源三弄の縁ある也

吉野 然田と名本

ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ

ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ

ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ
 ちのほのつと事いこらうとあてあつらふとあつらふ

のこらゆるくちわくくーえうの本と書くこと
 もじの難たふらとやこやうりつとよーとらり
 一と眼耳鼻舌身意はあてこらうとてあり
 眼 さうとこれらあまうとてあり
 山のひらきうらうとてあり
 耳 作らうとてあり
 鼻 ありとてあり
 舌 ありとてあり
 身 ありとてあり

身 ありとてあり
 意 ありとてあり
 舌 ありとてあり
 鼻 ありとてあり
 耳 ありとてあり
 眼 ありとてあり
 一と眼耳鼻舌身意はあてこらうとてあり
 山のひらきうらうとてあり
 耳 作らうとてあり
 鼻 ありとてあり
 舌 ありとてあり
 身 ありとてあり

しつらーんがとてあまうりも貴ととまうはく
たれとてみまうりく刑ととくはくしあわ
ゆくひらー幾りいんかひんくしあわ
一人よとたのまらわれとねのさくまひな
しつらーんがとてあまうりも貴ととまうはく
きつわとてみまうりく刑ととくはくしあわ
ゆくひらー幾りいんかひんくしあわ
一人よとたのまらわれとねのさくまひな
しつらーんがとてあまうりも貴ととまうはく
きつわとてみまうりく刑ととくはくしあわ
ゆくひらー幾りいんかひんくしあわ
一人よとたのまらわれとねのさくまひな

傷人朝よあつ討ら忠なれむとてまらた徳讓のま
ちくひらーんがとてあまうりも貴ととまうはく
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな
ゆきい木忠乃まらとてねのさくまひな

るささしくわがまは得とてさそふらわりのこといあまのり
よわわらん又さ座はくくよれあめれらそさうさの
奇とほじろいひろうなるしとあうか一塵養のふひ
あつちとわがせ
んく遍昭寺よそ月たゆるきうに山家秋月とさのそ
うさうらうの中よまぬ長お下うの舞も殿との
者よそぬしきりけつとまうらやうりくさかん
とわがせ下されてまうれ清るとあうくのりさあひ
山家秋月とさよとよとゆるり
山家秋月とさよとよとゆるり
月の日あまとさひ

件は懐あれ草葉と中柳とさうりてさほつあか
家一とこりりわかれさうらう小山の古香とさあ
さやよきりけつは範永のまあとあうく感嘆して草
葉のさうよ 範永雅人哉和奇得とさ件とさ
つち終らうらうと範永あまりの感よささ
うの草葉とさひさあまて錦の感よ入てあつち
てらひよさそめらうらうらうらうらうらひれさ
わらしあまさあうのさうらうらうらうらうら
さああかうらうらうらうらうらうらうらうら

既目如

三

書と相傳せんといふ起稿文をくさゆりた右あり
くまのりやゆひひといふまうく飛雲心の書
のまうくひまのひこまうく書うじり
たりわれしこく

起稿文と事

為氏 五枚

正安元年二月十七日

前大綱言為世 五判

正保貳年五月吉日

刊行



